

審査結果の要旨

氏名 井口 高志

この論文は認知症患者のことを「呆けゆく者」と規定している。本研究は、この「呆けゆく者」とその家族介護者との間のコミュニケーションの過程を、自らのフィールドワークに依拠しながら実証的に明らかにしようとしたものである。近年の認知症ケアは、患者の主体性を重視するようになっており、論文題目が示すように、現在は認知症ケアの「変革期」にあたる。このようなケアのあり方の変化のなかで、「呆けゆく者」と家族とのコミュニケーション過程がどのような状態に置かれるようになっていくか、といった点を社会的に明らかにすることが本論文の目的である。

本論文は大きく三つの部分に分けることができる。最初の部分（1章と2章）では、1960年代から現在に至る日本の高齢者ケア政策における言説と認知症に関する社会学的研究の成果を資料としながら、認知症に対する「まなざし」の変化が分析される。その結果、従来の疾患モデルに立脚した認知症理解が、次第に、関係モデルに立脚したものへと変化を遂げてきたことが明らかにされる。さらに、この関係モデルに対して、著者は社会学的な観点からの洗練を加えている。第二の部分（3章～5章）では、家族介護者へのインテンシブな面接調査のデータを利用しながら、「呆けゆく者」と家族介護者のコミュニケーション過程を明らかにしている。家族介護者は、「呆けゆく者」との出会いのなかで、相手の「正常な人間」像に直面するために、相手の「問題行動」を免責することが困難となる。また、家族と「呆けゆく者」との関係は、異質な他者との一時的な出会いではなく、相手の生活を支える介護関係として展開していくことになる。このため介護者は通常とは異なるコミュニケーション上の課題を引き受けることになる。第三の部分（6章と7章）では、介護者同士の集まりやデイサービスなどをつうじて「呆けゆく者」と関わる複数他者と接することが、家族介護者にとって重要な意味を持っていることが明らかにされる。さらに「呆けゆく者」を一人の人間として扱ううえで、こうした複数他者の存在が介護者に対する支援の機能を果たしていることが論じられる。

本論文の審査の過程では、家族介護者だけでなく施設介護者への言及も必要ではないか、使用するデータがナラティブに限定されているが、観察データも用いるべきではないか、などの意見も出された。しかし本論文は、以下の点で、社会学の研究に対する貢献が少なくない。(1) 認知症ケアの「変革期」にあつて、自我を有する人間としての「呆けゆく者」とのコミュニケーションは、社会学の先端的な研究テーマである。本論文は、このテーマに対して、長期のフィールドワークから得られた詳細なデータを提供した。(2) このテーマに関する従来の社会学の研究は、負担感研究、ソーシャルサポート研究などとして行われてきたが、本論文は、介護者と被介護者の二者間関係の外部にあるコミュニケーションに注目した点、ミクロの水準のコミュニケーション分析とマクロの水準の認知症ケアの思想の変化を結びつけようとした点などにおいて従来の研究にはない独自性を備えている。(3) 医療社会学の蓄積を踏まえて、社会的な<関係モデル>を提起している。

よって当審査委員会は、本論文が博士（社会学）の学位を授与するに値するとの結論に到達した。